

令和8年度全九州高等学校体育大会
第69回全九州高等学校登山競技大会
予報第1号



～牧場の里あづま(万里の長城)から見える放牧牛と鉢巻山～

(令和8年5月17日撮影:小畑)

主 催
九州高等学校体育連盟
長崎県教育委員会
後 援
(公財)長崎県スポーツ協会
雲仙市教育委員会
九州地区山岳協会
主 管
長崎県高等学校体育連盟登山競技専門部
長崎県山岳・スポーツライミング連盟

1. 令和8年度全九州高等学校体育大会第69回全九州高等学校登山競技大会について

競技委員長 小畑 喬晴

はじめに

ようこそ、長崎県雲仙山系へ。平成29年度以来、9年ぶりの開催となります。当時の大会役員を経験された方は少なくなりましたが、長崎県役員一同、参加される選手・監督の皆さまにとって思い出に残る大会となるよう、安全第一で運営に携わってまいります。また、昨年度の間伐工事や土砂災害等の影響によるコースの再設定や整備が必要であることに加え、今年度は長崎県高等学校総合体育大会の開催時期が他県より遅かったため、5月中旬から6月7日まで下見自粛期間を設定させていただきました。関係機関との連携によるコース整備も行われ、県大会を事故なく運営することができました。ご協力いただき、ありがとうございました。梅雨の時期となり、コース上の荒れも心配されますが、可能な限り対応してまいります。

さて、大会の舞台である雲仙山系は、東に有明海（面積約1,700 km²）、西に橘湾を望む島原半島の中心に位置します。平成の大合併後、島原市・南島原市・雲仙市の3市に分かれ、今大会のほとんどは雲仙市に属します。雲仙市は、平成17年10月に7町が合併して発足した市です。様々な場面で「雲仙岳」の表記が見られますが、実際に「雲仙岳」という山はありません。「雲仙岳」とは、広義には普賢岳・国見岳・妙見岳の三岳と、野岳・九千部岳・矢岳・高岩山・絹笠山の五峰からなる山体の総称（狭義には最初の三岳のみ）を言います。今大会は大会行動1日目に鉢巻山・吾妻岳コース、大会行動2日目に妙見岳・矢岳コースの2コースが設定されており、コースの多くは九州自然歩道に指定されています。（詳細は、コース概況参照。長崎県内の九州自然歩道は全長212km。）

「雲仙」の地名は、西暦701年に行基によって開山されたとされる「温泉山満明寺」の山号が元となり、古来より「温泉（うんぜん）」と表記されてきました。昭和9年に国立公園に指定された際、他の一般温泉地と区別するため「温泉」から「雲仙」へ改められました。雲仙温泉は古くから信仰の地として知られ、フロイス（ポルトガルのイエズス会宣教師。著書『日本史』）は温泉岳の繁栄等を記録していました。さらに、ケンペル（著書『日本史話』）に雲仙の地名が掲載）やシーボルト（オランダ商館医。著書『日本』）の中で雲仙の山岳美と温泉を絶賛。“UNZEN・TAKE”として紹介。）は、ヨーロッパに避暑地として紹介しました。また、昭和12年にはヘレン・ケラーも雲仙を訪れた記録が残っています。池の原園地のそばにある雲仙ゴルフ場は、日本最初のパブリックコースとして大正2年に開設された歴史あるゴルフ場です。

雲仙山系は、明治44年に日本初の県営温泉公園となり、昭和2年に日本新八景山岳部門に選出されました。その後、昭和3年に「温泉岳」として国の名勝に指定、昭和9年3月16日に瀬戸内海や霧島とともに日本で最初の国立公園「雲仙国立公園」が誕生しました。また、昭和27年に文化財保護法により富士山とともに「特別名勝」へと格上げ、昭和31年には天草地域が追加されて、「雲仙天草国立公園」として指定されました。雲仙山系がある島原半島は、平成21年に地質の世界遺産「世界ジオパーク」に日本初認定、平成27年に「ユネスコ世界ジオパーク」として認定され、令和4年に3度目の再認定がされました。（ユネスコ世界ジオパーク世界50か国229地域、日本10地域認定。令和7年4月時点。）

このように雲仙の明るい歴史の裏には、2つの大きな火山災害の歴史を忘れてはいけません。

1つ目は、江戸時代の寛政4年（1792年）5月21日。大地震に伴い島原市の背後の眉山の東斜面が大崩壊。崩壊した土砂が有明海に流れ込み、大津波が発生し、対岸の熊本・天草を中心に15,000人以上の住民が犠牲になりました。このことを『島原大變肥後迷惑』といい、有史以来日本最大級の火山災害です。

2つ目は、平成2年11月17日。普賢岳の活動が開始され、九十九島火口、地獄跡火口から噴煙があがり、さらに屏風



岩火口でも噴火が発生しました。平成3年5月20日地獄跡火口から溶岩ドームが出現し、その4日後には溶岩塊が崩落し最初の火砕流が発生しました。その後、6月3日の火砕流発生では家屋の焼失に加え、「定点」と呼ばれる場所付近で火砕流に巻き込まれた犠牲者が40名を越え、甚大な被害を受けました。また、火砕流堆積物やドームの溶岩塊の崩落物が、土石流として水無川や中尾川に流れ下り、家屋が流出し、交通機関もマヒしました。平成8年6月3日に噴火活動の終息宣言が出されるまで、火砕流の発生は約9000回を数えました。今年6月3日で、火砕流による甚大な被害の発生から35年を迎えました。登山する私たちも含め、噴火災害の風化をさせないように災害の教訓を後世に伝えていかなければなりません。

約5年間かけて成長した溶岩ドームは平成新山と命名され、平成16年に国の天然記念物に指定された長崎県の最高峰となっています。現在の火山活動は小康状態ですが、溶岩ドームの崩落が心配されています。そのため、平成新山は警戒区域が設定されていて一般登山はできませんが、登山道開放に向けた協議が関係機関で現在行われており、登山できる日がくるかもしれません。

様々な火山災害がありましたが、雲仙山系は豊かな自然をもち、国指定の天然記念物も多く指定されています。植物の国指定天然記念物として、「普賢岳紅葉樹林」「野岳イヌツゲ群落」「池の原ミヤマキリシマ群落」「地獄地帯シロドウダン群落」「原生沼沼野植物群落」の5種類があり、そして、平成新山も国の天然記念物に指定されています。

ミヤマキリシマ群落が見られる場所は、雲仙ゴルフ場一帯の池の原園地が第一で、昭和3年に「池の原ミヤマキリシマ群落」として早くから国の天然記念物に指定を受けています。この他には仁田峠一帯、小地獄に近い宝原園地にも大きな群落があります。ミヤマキリシマのことを長崎県人は「ウンゼンツツジ」と呼び、長崎県の県花にも指定されています。ミヤマキリシマは雲仙山系のほか、霧島・阿蘇・久住などの九州の高い山々に自生する特有のツツジです。また、江戸時代から馬や牛の放牧地として知られていた田代原は、ミヤマキリシマが群生していました。しかし、近年では放牧する牛の数の減少等により、草地に藪やアカマツ林が侵入し、ミヤマキリシマの生息域が急速に減少していると報告されています。現在、地域のNPOや大学、企業等が保全に向けて活動をしています。ぜひ皆さんにも、このような環境保全活動に参加していただき、自然豊かな雲仙を守ってほしいと思います。



～池の原園地に咲くミヤマキリシマ～
(令和8年4月25日撮影:小畑)

最後に、お山雲仙との3つの約束を紹介して終わりとします。

「とるまい、おるまい、すてるまい」

2.<地名の読み方>

- ・鉢巻山 (はちまきやま)
- ・吾妻岳 (あづまだけ)
- ・吾妻観音 (あづまかんのん)
- ・馬頭観音 (ばとうかんのん)
- ・田代原 (たしろばる)
- ・九千部岳 (くせんぶだけ)
- ・南の肩 (みなみのかた)
- ・牛の首 (うしのくび)
- ・第2吹越 (だい2ふっこし)
- ・妙見岳 (みょうけんだけ)
- ・国見岳 (くにみだけ)
- ・普賢岳 (ふげんだけ)
- ・平成新山 (へいせいしんざん)
- ・紅葉茶屋 (もみぢちゃや)
- ・薊谷 (あざみだに)
- ・仁田峠 (にたとうげ)
- ・絹笠山 (きぬがさやま)
- ・鳥甲山 (とりかぶとやま)
- ・野岳 (のだけ)
- ・舞岳 (まいだけ)
- ・眉山 (まゆやま)
- ・矢岳 (やだけ)
- ・千々石 (ちぢわ)
- ・小浜 (おばま)
- ・牧場の里 (まきばのさと)
- ・万里の長城 (ばんりのちようじょう)
- ・雲仙 (うんぜん)
- ・弘法原 (こうぼうばる)
- ・稲生山 (いなおやま)
- ・鴛鴦の池 (おしどりのいけ)
- ・寿妙院 (じゅみょういん)
- ・岩床山 (いわとこやま)
- ・高岩山 (たかいわやま)
- ・石割山 (いしわれやま)
- ・稚児落しの滝
(ちごおとしのたき)
- ・白雲の池 (しらくものいけ)
- ・風穴 (かざあな)
- ・鳩穴 (はとあな)
- ・鬼人谷 (きじんだに)
- ・霧氷沢 (むひょうざわ)
- ・橘神社 (たちばなじんじゃ)
- ・小浜町 (おばまちょう)
- ・*猿葉山 (さるばさん/さるはやま*)
- ・妙見神社 (みょうけんじんじゃ)
- ・江丸岳 (えまるだけ)
- ・宝原園地 (ほうばるえんち)

※猿葉山の読み方の*は雲仙市役所 HP 掲載。

※文献によって様々な読み方があるが、今大会は上の記載通りとする。

3.<雲仙山系の山の標高>

山名	標高(m)	山名	標高(m)	山名	標高(m)
平成新山	1483	普賢岳	1359.2	国見岳	1347
妙見岳	1333	野岳	1142	九千部岳	1062.1
矢岳	971	石割山	968	高岩山	880.7
絹笠山	879	吾妻岳	869.7	鳥甲山	822.1
舞岳	703	鉢巻山	638.0	猿葉山	364

*文献によって様々な標高があるが、今大会は上の記載通りとする。

4.<コース案内> (凡例: 主要地点名_ = 登山行動 ⇒ バス移動)

<第1日目>

(千々石中学校～田代原キャンプ場はメインザック行動、吾妻岳ピストンはサブザック行動)

千々石中学校 = 日向平線出合 = 弘法原 = 万里の長城分岐 = 万里の長城 = 鉢巻山 = 鉢巻・吾妻コル = 九州自然歩道出合 = 田代原キャンプ場 = 吾妻観音 = 田代原キャンプ場 = 九州自然歩道出合 = 万里の長城分岐 = 弘法原 = 日向平線出合 = 千々石中学校

<第2日目> (田代原キャンプ場～仁田峠はメインザック行動、以降はサブザック行動)

千々石中学校 ⇒ 田代原キャンプ場 = 寿妙院分岐 = 南の肩 = 牛の首 = 国道出合 = 第2吹越 = 国見・妙見コル = 妙見岳 = 妙見岳駅 = 仁田峠 = 池の原園地 = 矢岳登山口 = 矢岳 = 宝原園地(解団式) = 青雲荘(宿舎)

*隊行動、チーム行動、パーティ行動の区別は予報2号にてお知らせします。

5.<雲仙に見られる植物>

田代原一帯では、5月の色鮮やかなミヤマキリシマの花に始まり、初夏はヤマボウシが白い花を咲かせる。特に、山の至るところに咲き誇るヤマボウシの花は奥雲仙の風物詩となっている。秋になると田代原の広い草原にはアキノキリンソウや有毒なウンゼントリカブトなどの野草が一斉に色とりどりの花を開く。

普賢岳周辺では、高総体時期に2つの花が見られる。霧氷沢分かれては5月中旬にヒカゲツツジが見られる。また、鬼人谷口から北の風穴までの途中には、6月中旬頃にオオヤマレンゲ(「天女花」、「森の貴婦人」とも呼ばれる)が短い日数だけ咲き、長崎県では雲仙岳周辺のみしか見られないので、機会があれば行ってみたい。



ミヤマキリシマ

(令和8年4月 25日小畑撮影)



ウンゼントリカブト

(平成30年10月7日小畑撮影)



ヤマボウシ

(令和8年6月7日小畑撮影)

6.<雲仙の名がついた昆虫>

①ウンゼンチビゴミムシ(ゴミムシ科)

褐色の小さなゴミムシの一種で雲仙山系にしか見られない。森の地上で生活し、後ばねが退化しているので昆虫なのに飛ぶことができない。

②ウンゼンツユムシ(キリギリス科)

草の葉に似た黄緑色のキリギリス科の一種で、最初雲仙山系で発見されたので、それを記念して名がつけられたもので、ゴルフ場付近から上の、下草の上で生息している。その後九州各地や四国の山地にもいることがわかったが、北海道や本州では見つかっていない。夜行性で「ジキジキジキ…」と鳴く。

③ウンゼンハダカササキリモドキ(キリギリス科)

1978年に雲仙山系で発見され、それを記念して名がつけられた。黄緑色、体長は1cmほど。はねが退化して飛ばず、また鳴くこともできない。雲仙山系では仁田峠付近から普賢岳の樹木上に生息していたが、噴火後見られなくなっている。長崎県多良山系でも発見されたが、日本のほかの地方では発見されていない。

④ウンゼンルリクワガタ(クワガタムシ科)

1cmほどの小さなクワガタで、雲仙岳のルリクワガタは他の地方産と色が少し違っているため雲仙亜種として区別されている。雲仙山系では普賢岳の落葉樹林のみに生息し、幼虫は朽ちた木の中で育つ。

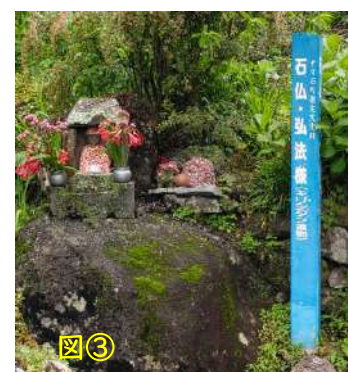
7.<コース概況>(下線部のある地名は主要地点名。写真は全て小畑が撮影。)

【7月4日(土)鉢巻山・吾妻岳コース】

行動1日目にあたる4日は鉢巻山、吾妻岳の2つの山を踏破する。

幕営地である千々石中学校は、平成29年度開催の時もご協力いただき、今大会も様々な面でご配慮いただいている。大会前の敷地内等への立ち入りは絶対にしないこと。

千々石中学校からはメインザックを担ぎ、千々石中学校から弘法原、万里の長城を經由して鉢巻山を目指す。「大操子(ウグルス)の石仏」(図①)、さらに上峰川に架かる大中橋(図②)を渡った後にキリシタン石仏の案内看板など、所々でキリシタンの史跡を見ることが出来る。その後、上峰公民館の三叉路を左に曲がると、右手に上嶺神社がある。その神社を過ぎた三叉路を左へ曲がり、みかん畑の横を登る。登る途中にはキリシタン遺物の「石仏・弘法様」(図③)が見えるので確認してほしい。一旦登り切ると農道と出会う。ここが日向平線出合(図④・⑤)である。



日向平(ひなたびら)線は農道である。一旦後ろを振り向くと橋湾や千々石の街並みが一望できる。農道を渡って登山道へ入り、石垣の横を通過すると少し薄暗い登山道となる。普段このコースは登山者が少なく、道が荒れているため、足元に十分注意が必要である。また、風が吹かない地形で熱中症になりやすいため、登山前に水分補給を十分することを強く勧める。しばらく進むと大きな駐車場に着く。(今大会は駐車場を主要地点弘法原とする。図⑥)



弘法原から万里の長城分岐までは綺麗な登山道が続き、樹林帯を歩くことになる。登山道に接近する車道や送電線との位置で、現在地を確認しやすいため、迷うことはない。



九州自然歩道に関する看板を過ぎて少し下ると、万里の長城への案内看板がある万里の長城分岐(図⑦)で左に曲がる(なお、スタート地点からここまでは九州自然歩道である。)。正面に見える岩壁を過ぎると急登となる。安全確保で設置されたロープがあるが、擦れてやけどする可能性があるため、手袋を着用して通行すること。急登を過ぎると万里の長城が見え、少し下ると駐車場とトイレがある。(ここを主要地点万里の長城とする。図⑧)。トイレの利用時はトイレトーパーを持参すること。なお、万里



の長城がある「牧場の里あづま」は、約100頭の牛が放牧され、駐車場付近でも牛が休む光景が見られる。休憩中は、牛が興奮しないように大きな声をなるべく出さないこと。

万里の長城の上を通過して、鉢巻山登山口へ向かう。万里の長城の端にたどり着くと、「鉢巻山」と記載している白看板方向へ進む。しばらく稜線上を歩くが、道上に放牧牛の糞の形跡が所々あるため、注意して登ること。

「鉢巻山まであと〇〇m」の看板が概ね100mおきに設置されている。特に500m~600mと100m~200m付近の急登は、安全面確保でフィックストロープが設置され、役員も配置予定である。混雑が予想されるが、ロープの負荷軽減に向け、ロープを結ぶ木と木との間の使用は原則1名とする。なお、フィックストロープのある区間は手袋を着用して登山行動すること。

山頂まで残り100mになると展望岩との分岐となる。右に曲がると、橘湾や遠くは諫早湾なども見ることが出来る絶景ポイントである。分岐点を左に曲がり、しばらく登ると鉢巻山(図⑨)に着く。残念ながら展望はなく、鉢巻山を表す看板と三角点がある。この付近はアザミやトゲのある植物が群生しているため、先ほどの分岐点以降は、手袋を着用すること。山頂以降はなだらかな稜線で、1つ目の展望岩の案内看板を見たら、稜線上右に曲がる。その後、木々が茂って通過しにくい箇所がある。右にある展望岩(看板はありません)を過ぎると、フィックストロープ設置の下りとなる。役員を配置予定なので、安全に下山して欲しい。急な下りを終えると、弘法原への分岐を示す看板がある。ここが鉢巻・吾妻コル(図⑩)である。本来であれば、30m先の九州



自然歩道につながるルートを検討したが、細い道かつ滑落等の危険性があるためコースから除外した。また、吾妻岳直登ルートも検討したが、平成20年度の長崎県高校総体を最後に使用しておらず、現在はコースが藪化して登山道を見失う危険性があるため、今大会は九州自然歩道へ向かうコースへ進む。

さて、コルを下るとロープが設置されている沢がある。少し滑りやすいため、注意が必要だ。その後、トラバースしながら九州自然歩道出合に着く。九州自然歩道出合を右へ曲がると千々石中学校へ戻る。今回は左へ曲がり、田代原キャンプ場へ向かう。この付近から杉などの針葉樹林帯や、花の先が横に伸び、



蛇が舌を出す姿を連想させるマムシグサ(図⑪)が道脇に見られるようになる。

しばらく歩くと林道終点広場に到着する。ここから、道幅が狭い登山道となる。しばらく進むと、先ほど紹介した鉢巻・吾妻コルへの険しいルート分岐看板が左にある(見落としやすい)。その後、



途中大きな沢を越えて一気に登る。降雨後のみ水が流れる枯れ沢(標高570m付近)を渡り、標高600m付近まで登ると正面に九千部岳や平成新山を一望できる開けた場所にたどり着く。さらに数分歩くと吾妻岳への分岐(図⑫)がある。この分岐を過ぎてすぐに右に広場(図⑬)が見える。この広場を含めて主要地点田代原キャンプ

場とする。広場に到着後、メインザックをデポし、サブザックで吾妻岳へ向かう。

図⑫の分岐へ戻り、吾妻岳に登る。吾妻岳に登る途中に馬頭観音(図⑭)が祀られている。ここを通過すると、ガレ場や



せまい道が多く、急登である。落石注意も含めて安全に登ってほしい。赤い階段(図⑮)を過ぎると、急登も終わり、吾妻岳山頂への分岐に到着する。分岐点を右に曲がり、約20m進むと山頂(図⑯)である。

残念ながら眺望はなく、看板だけがある。山頂は休憩スペースが狭いため、今大会の山頂への行動は役員の指示にしたがってもらう。山頂の分岐を直進し、しばらく進むと吾妻観音と鉢巻・吾妻コルとの分岐点につき、左へ下っていくと吾妻観

音(図⑰)に到着する。吾妻観音は晴れると、千々石断層や橘湾、九千部岳などが見られ、本コースの中で眺望が一番いいポイントである。吾妻観音で景色を堪能した後は、田代原キャンプ場へ下山する。



図⑰

田代原キャンプ場に到着後は、メインザックに詰め直し、千々石中学校へ戻る。なお、九州自然歩道分岐から万里の長城分岐の区間は鉢巻山には行かず、九州自然歩道区間を通っていく。途中に千々石町へ下ることができる分岐があるが、そこを右に曲がって弘法原へ向かう。弘法原から千々石中学校までの間は基本下山である。登山中の怪我は下山で起こることが多い。足元をしっかりと確認した上で、下山して欲しい。千々石中学校に到着後は役員の指示に従って小浜温泉へバス移動する。

【7月5日(日)妙見岳・矢岳コース】

行動2日目にあたる5日は妙見岳、矢岳の2つの山を踏破する。

引継式後、千々石中学校から橘公園の鳥居がある国道57号線沿いの駐車場へ移動する。途中、千々石川に架かる軍神橋(図⑱)を渡り、バスに乗車して雲仙市千々石町田代原にある田代原キャンプ場へ向かう。(今大会は、中学校から橘公園の駐車場までの一帯を主要地点千々石中学校とする。)なお、橘神社は、高さ約14mの門松が有名で、桜の名所としても知られている。地元出身で日露戦争に従軍し、遼陽の戦いで戦没した橘周太陸軍中佐(図⑲)を祀るため、1940年長崎県社として創建された。トイレは田代原キャンプ場にもあるが、約50分の移動のため、バス乗車前にトイレを済ませることを強く勧める。



図⑱



図⑲

田代原キャンプ場にバス到着後、役員の指示に従って行動開始の準備をする。この田代原付近一帯は、「奥雲仙」の名称で呼ばれ、千々石断層(南落ちの正断層)によって出来た盆地であり、北には前日に登った吾妻岳の断層崖がそびえ、南には牧場を隔てて雲仙山系で第6位の九千部岳がなだらかな尾根を見せている。九千部岳(図⑳)。田代原キャンプ場から見た九千部岳)のふもとにある



図⑳

る田代原牧場では、初夏から晩秋まで牛の放牧を見ることができ、放牧によってミヤマキリシマが保全されてきた。また、この一帯は田代原風致探勝林区域とされ、「日本美しいの森～お薦めの国有林～」に選定されている。なお、スタート前にトイレができるように、田代原キャンプ場および田代原トレイルセンターを開けていただくように申請中です。

田代原トレイルセンター沿いの県道210号線を渡り、牧場沿いの九州自然歩道の入口から、メインザックを担いでスタートする。なお、トイレは仁田峠までないため、事前に済ませること。

行動開始後、しばらく進むと木道が所々ある。以前は寿妙院分岐まで2か所の東屋があり、木道も多く設置されていた。しかし、腐食が進み危険箇所も増えたため、令和8年2～3月にかけて東屋や木道の撤去作業が行われ、木道で覆われていた登山道は土がむき出しとなっている。令和8年4月末の降雨で土砂が牧場へ流れ、一部歩きにくい所が増えているため、足元には注意して欲しい。

寿妙院分岐の手前では、晴れると鳥甲山を見ることができる(図㉑)。中央の山は鳥甲山)。寿妙院分岐は土砂が流れ込み、柵がほとんど埋もれているため、普段は柵から寿妙院へ直接行くことはできない。また、直進すると県道210号線に合流するが、今回は右へ曲がり、洗堀された道を通って、南の肩や第2吹越方面へと向かう。50mほど登ると林道と出会う。令和7年度の保育間伐として伐採作業が行われ、この先から何度か登山道と作業道が交差する。一部



図㉑

登山道と作業道の区別がつきにくいですが、ロープ、および登山道方面に黄色いテープの設置をしていただいた。黄色のテープがある方向が登山コースである。基本は、まっすぐ登るとよい。特に降雨時や降雨後登山道は作業道の交差におけるぬかるみが多い。歩行に十分注意してほしい。最後の作業道との交差を過ぎると、苔石が多く滑りやすい急登の階段となる。各チーム内で離れないように歩いてほしい。その後、自然歩道に関する看板とベンチがある広場CPI(図⑳)に到着する。



ベンチの広場を過ぎて少し登ると南の肩(図㉓)と呼ばれる九千部岳方面と第2吹越方面の分岐に着く。以前は九千部岳方面に鳥居があったが、今は跡形もなく、小さなベンチが設置されている。南の肩を過ぎると、ミヤマキリシマが生い茂る所を通過する。頭上やザックが枝にかからないように注意すること。雨天時は、ぬかるみがひどいため、足元にも気を付けて通過してほしい。その後、ややトラバース気味に尾根を幾度か横切り、なだらかな登山道を歩く。途中に路肩注意の区間を示す看板があるので、注意してほしい。しばらく歩くとササが生い茂る牛の首と呼ばれるコルを通過し、国道出合真(図㉔)となる。この国道は国道389号線で、雲仙温泉街方面と国見町方面の双方とも交通量が多いので、車道沿いを歩く際は車に気を付けてほしい。



途中木段が一部崩れかけたり、ササが多く茂っていたりと歩きにくいところが多々ある。コース途中で適宜休憩をとっても構わないが、数年前の県大会でコース外にザックを滑落させたチームがあるため、安全面を確保して休憩すること。また、国見岳と妙見岳・仁田峠の分岐となる国見・妙見コル(1280m)のT字路まで登ると、晴れたときには目の前に薊谷や普賢岳、平成新山、有明海を見ることが出来る。また、紅葉の季節には、天然記念物の普賢岳紅葉樹林も見ることが出来る。なお、T字路は往来する登山客が多いため、迷惑にならないように注意して休憩してほしい。

その後、吹越トンネル横の広場に着く。(トンネル完成前に使用していた国道は廃道となり、現在立入禁止。)ここが、国見・妙見コルへの登り口・第2吹越(図㉕)である。

第2吹越はいきなり階段スタートとなる。ここからの標高差約380mの登りは、このコースで最も体力を要する部分となる。



<令和6年3月、国見分かれ～鬼人谷口の登山道が崩落し、通行止めとなった。令和7年4月11日より迂回路が開通したが、専門部として大会中の安全面確保ができないと判断し、国見分かれ～鬼人谷口コースを除外した。また、令和7年8月11日の豪雨により紅葉茶屋付近の登山道崩壊に伴い、仁田峠～紅葉茶屋が通行止めとなった。令和8年4月1日より仁田峠～あざみ谷は通行可となったが、紅葉茶屋の復旧の見通しが立っていない。よって、今大会は普賢岳の登山コースを見送る。復旧された際の参考としてコース概況を記す。復旧後はぜひ登山してほしい。>

国見・妙見コルを左に曲がり、ミヤマキリシマの生い茂る細い道を通り、国見分かれへ向かう。国見分かれから国見岳山頂までは20分ほどで着く。鎖やロープを使う岩場や険しい登りのため、初心者には厳しい。また、長崎県高校総体の5月下旬から6月上旬にかけて、国見岳は山一面をピンク色に染めるミヤマキリシマを見る登山客が多く、混雑の恐れがある。マナーを守って行動してほしい。国見分かれからは東の方向へ急な下りが続く。登山道崩落に伴い、最近迂回路が設置されて通行可能となったが、危険な箇所があるとの報告があるため、下山中は転倒しないように気を付けたい。下り終わった分岐が鬼人谷口である。ここからのルートは1990年以降の普賢岳噴火により封鎖されていた登山道(2012年5月開通)へ向かう。20年近く封鎖されていたため、自然豊かなコースである。しばらく進むと夏でも冷気が漂う「西の風穴」に到着。西の風穴は、夏でも風穴内は4℃を保ち、涼しい特性として蚕の卵の保存に利用され、九州各地へ安定的な蚕の生産をしていた。また、西の風穴をしばらく進むと世界に1科1属1種の近縁種のない特異で貴重な常緑高木樹であるヤマグルマ(図㉖)の説明看板がある。ヤマグル



マは樹皮が“とりもち”の材料になることから別名「トリモチノキ」と呼ばれることもある。ヤマグルマは岩肌が露出し、空気の動きのある場所を好んで生える。「ヤマグルマ」の看板を通過し、その周辺の北側にある江丸岳を見つ、「北の風穴」へ向かう。北の風穴も西の風穴と同様に冷気が漂い、入り口付近では岩が柱のように割れる「柱状節理」が見られる。なお、鬼人谷口から北の風穴までの道中では、6月中旬頃にオオヤマレンゲ（「天女花」、「森の貴婦人」とも呼ばれる。左写真）が短い日数だけ咲く。長崎県では雲仙岳周辺のみしか見られないので、機会があればみてほしい。

風穴二つを過ぎると、湯江川の源流の看板があり、さらに歩くと「鳩穴分かれ」（SOSポイント指定）に到着する。目の前には島原半島北部の街並みや有明海が一望でき、妙見カルデラの外輪山とされる国見岳、江丸岳が見える。鳩穴は1663年の寛文の噴火の際にできた溶岩トンネルで、夏でも天然の氷が残るほど冷気で充たされた場所だったが、現在は平成の噴火で埋没した。この付近は、平成の噴火の際に飛来したと思われる「パン皮状火山弾」（ある程度粘り気の強い溶岩塊が空中に飛び出し、表面が急に冷え固まり、岩の中でガスが膨張し、フランスパンのようなひび割れが生じた火山弾）が散在している。鳩穴分かれからは、左側に火砕流跡を見ながら、急登を歩き、立岩の峰へ向かう。なお、「鳩穴分かれ」⇒「立岩の峰」⇒「霧氷沢分かれ」は一方通行、平成新山側の登山道脇は警戒区域で立入禁止である。立岩の峰の展望所（SOSポイント指定）では、目の前に平成新山の溶岩ドームが迫り、巨石や水蒸気など迫力のある風景が望める。なお、溶岩ドームは、約2万年前に妙見火山が大崩壊してできた妙見カルデラの中に、島ノ峰溶岩ドーム、平成新山ドーム、普賢岳溶岩ドーム、立岩の峰溶岩ドームの4つがある。展望所を後にし、5月中旬にかけて咲き誇るヒカゲツツジの谷を越えると霧氷沢分かれに到着する。霧氷沢は、冷え込んだ冬に霧氷（0℃以下に過冷却した雲粒や霧粒が樹木やその他の地物にふきつけられて氷となったもの。地元では「花ぼうろ」とも呼ばれる）を見ることができ。

なだらかな道を通ると右手に「秩父宮殿下御登山記念碑」があり、普賢神社の祠がある普賢岳直下の広場（SOSポイント指定）に到着する。普賢岳直下の広場から1～2分登ると普賢岳頂上である。頂上からは平成新山や国見岳、妙見岳、野岳などが一望できる。普賢岳付近の岩石は石英の斑晶を含むのが特徴で、流紋岩と安山岩の中間のデイサイトが中心である。頂上での休憩後、紅葉茶屋（1200m）へ向かう。普賢岳から紅葉茶屋の間は岩がゴロゴロしており、特に鎖がある場所は足元も悪く、十分注意する。なお、登り優先のため、ルールを守って下山すること。紅葉茶屋では鬼人谷と薊谷との分岐点である。薊谷方面へ向かい、連続したカーブを下り終わると「あざみ谷」の看板があるベンチ広場に着く。ここには鳥が水を飲む場所があり、バードウォッチを楽しむ方も多いため、静かに通過したい。この付近は、ブナやコハウチワカエデなどが生育され、「森林浴の森・日本百選」に選定されている。広場後は、モミの木浴いを歩きながら、仁田峠へ向かう。

<今大会の国見・妙見コル以後は、以下のコース概況となる。>

国見・妙見コル後、ミヤマキリシマの生い茂る細い道を通り、妙見岳から仁田峠を経由して、池の原園地へ向かう。現在、紅葉茶屋付近の通行止めに伴い、設定したコースと普賢岳へのルートと重複する。普賢岳へ向かう登山客が多いため、往來には注意すること。妙見岳までの稜線上の所々では九千部岳や橋湾などを右手に見ることができる。（図⑳）

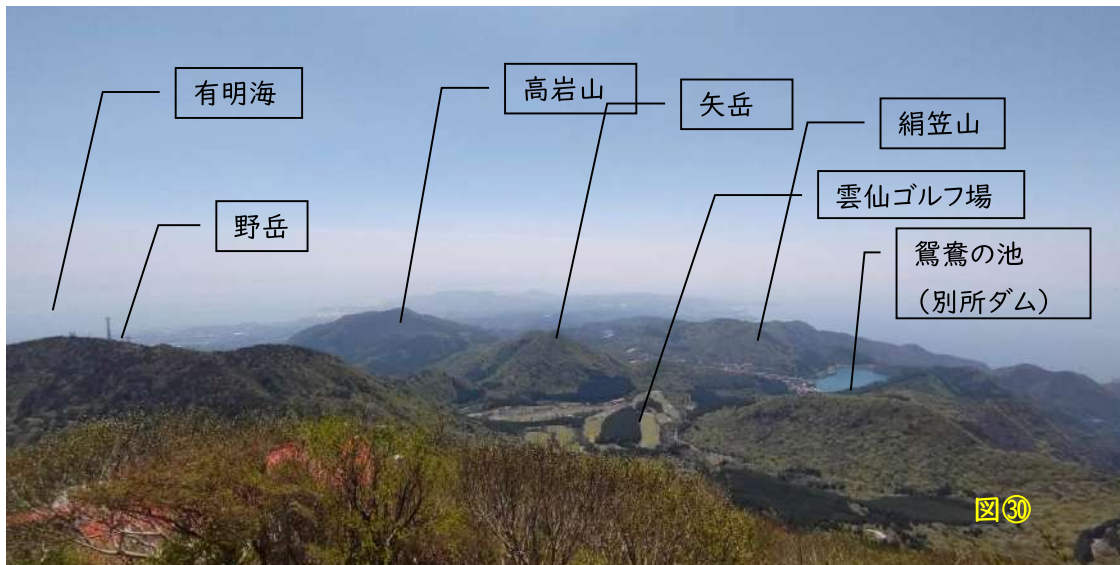


図⑳

また左手には普賢岳およびその奥にそびえる平成新山を眺めることができる。(図⑳)。10分ほど歩くとベンチがある妙見神社がある妙見岳(図㉑)。社の横に本来は妙見岳頂上に続く登山道があったが、こちらも登山道崩落による通行止めとなり、妙見岳山頂は残念ながら登頂できない。今大会は妙見神社を主要地点妙見岳とする。)



この後は下りが続き、途中に昭和 32 年開業の雲仙ロープウェイの妙見岳駅の展望台に着く。ここは、晴れた時は図㉒の写真のように野岳、矢岳、高岩山、遠くは天草など、島原半島の南部が一望できる。



妙見岳駅は観光客が多いため、トイレ以外は立ち入らないこと。(図㉓)さらに下ると左手にロープウェイのワイヤーロープが見え、時間によってはゴンドラが動いている。急な下りが終わり、ミヤマキリシマの群生が見えると雲仙ロープウェイの仁田峠駅と仁田峠駐車場の分岐に出る。仁田峠駅周辺では、噴火後に移設された普賢神社や、平成新山や島原市、有明海、赤松谷を眺める仁田峠第一展望台、徳富蘇峰が揮毫した記念碑「大智碑」がある。今回はここには寄らず駐車場へ下る。仁田峠は、初夏にミヤマキリシマ、秋には紅葉、冬には霧



氷、平成新山見物と年中大型バスが停まる観光地である。駐車場まで降りると観光バス等が多く出入りするため、注意して仁田峠循環道路を横断する。今回は横断後のトイレ地点を仁田峠(図㉔)とする。トイレ横の左には野岳への登山道があるが、今回はトイレの右横の脇道へ進み、池の原園地へ向かう。なお、売店横のトイレも使用可であるが、売店で購入は禁止とする。

仁田峠から第3ポンプ室や仁田峠循環道路の最接近箇所を通過し、第2ポンプ室へと下る。道中には弘法大師の像(右写真)があるので、ぜひ探してほしい。アスファルトのコンクリート道まで下ると、左右に様々な名前をついた広場がある。この辺りから池の原園地と呼ばれ、昭和 45 年に開かれた第13回全国自然公園大会の主会場ともなった。妙見駐車場、野岳駐車場を過ぎ、日本最初のパブリックコースである雲仙ゴルフ場と国道 389 号線との接近を超えると、矢岳駐車場に到着する。今大会は矢岳駐車場を池の原園地とする。なお、池の原園



地は、国の天然記念物「池の原ミヤマキリシマ群落」が見られる。



矢岳駐車場を過ぎると、国道389号線と国道57号線との分岐点(図34)に到着し、仁田峠循環道路入口方面に向かって車道沿いを進む。交通量が多いため、役員の指示に従って横断すること。約200m進むと矢岳登山口に到着する。(図35)

登山口をしばらく進むと分岐を2ヶ所通過する。2ヶ所目の分岐では、矢岳園地や大叫喚地獄に向かうルートの通行止めの看板を見ながら、左に折れて矢岳山頂に向かう。ここから先は少し急な登りがあるので、チーム内で歩調を合わせて登ってほしい。途中木道が見えると、頂上まではもう少しだ。分岐点にさしかかり、右へ50m進むと矢岳山頂である。(図39) 矢岳山頂からは、下ってきた妙見岳や雲仙ロープウェイ、平成新山、野岳、雲仙ゴルフ場、九千部岳を見渡すこと

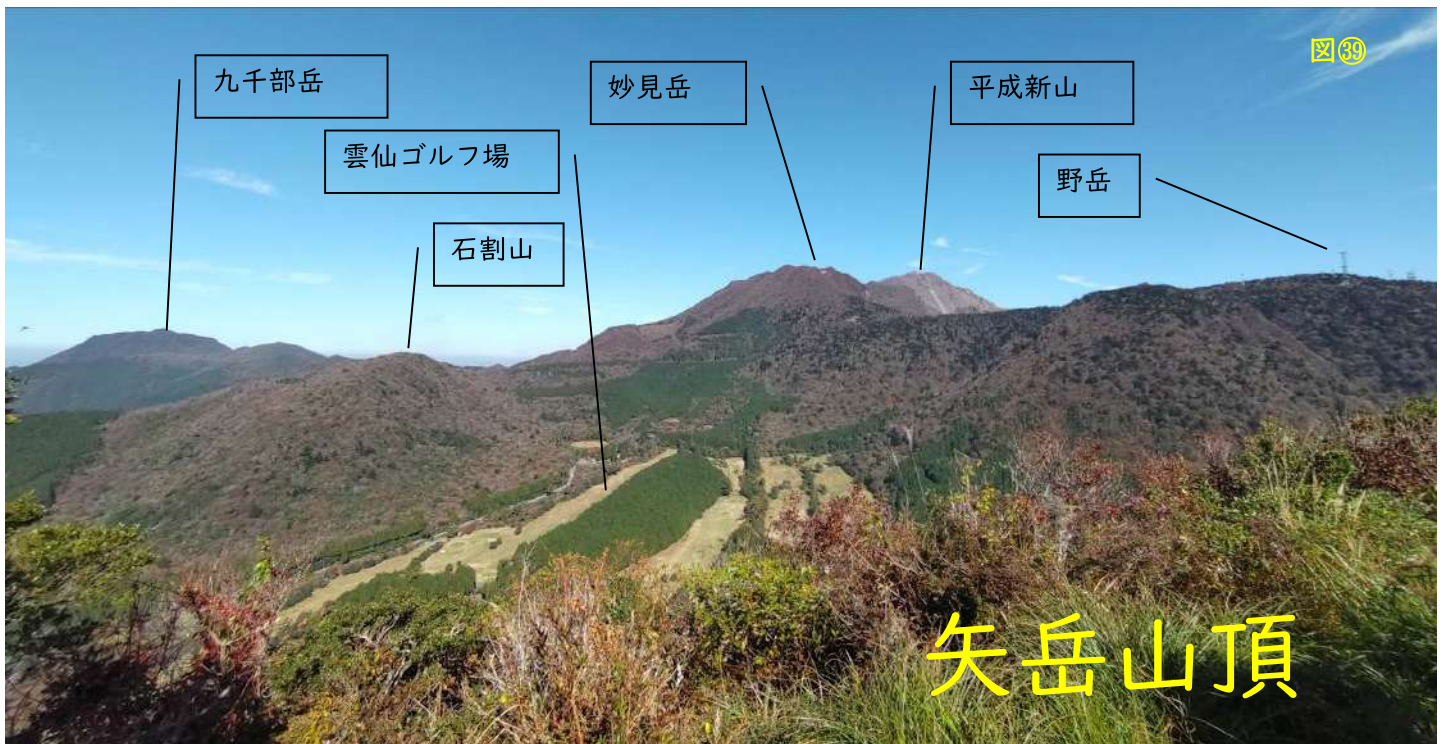


とができる絶好のフオトスポットである。山頂で休憩後は、宝原園地へ下り始める。途中、三角点の広場(図36)があり、西側にある絹笠山を眺めることができる。この後の下りはフィックストロープが設置され、一部滑りやすい所があるため、チームのスピードを調整しながら下ること。車道(宝原道路)が左に見え始めると緩やかな下りとなり、登山口(図37)にたどり着く。宝原道路を横断し、登山道を数100m進むと宝原園地に到着する。宝原園地もミヤマキリシマ群落の1つであり、トイレや駐車場も完備されている。今大会はここで解団式を行う予定である。なお、宝原園地から高岩山への登山口もある。高岩山は雲仙の山の中で最南端の山であり、北側では雲仙山系、南側では南島原の町並みや有明海、天草諸島を眺めることが



できる。高岩山の頂上には地元の農民の手伝いをしていたと言い伝えられる「みそ五郎」の像(図38)が座っている。ぜひ、時間があれば登ってほしい山である。

解団式後は指定宿舎「青雲荘」へ向かう。大会最終日の閉会式は「青雲荘」にて閉会式を行う。



諸連絡

1. 大会会場について、次の注意事項を守ること。

- ① 会場の千々石中学校・千々石公民館は大会期間中特別に許可を得ている。大会期間前の各施設の敷地内の出入りを固く禁止する。また、千々石中学校付近は民家が多いため、大会を通じて大声等を出さないように心がけること。
- ② 今大会のコースは国立公園内を行動するため、関係機関と連携してコース整備を行っている。勝手にロープやテープ等をつけたりしないこと。また、コース中には、道迷い防止のためのロープ、安全面確保のためのロープの2種類がある。細いロープを握ると切れる可能性もあるため、注意をしながら行動すること。
- ③ 紅葉茶屋の通行止めを受け、妙見岳～仁田峠区間は登山客が例年より多く登山されている。離合する際は「登り」を優先すること。
- ④ 大会山域の中で、携帯電話の電波がつながりにくい箇所が多くある。下見等をする際はその点に留意して行動すること。(鉢巻山～田代原キャンプ場、第2吹越、宝原園地周辺)

2. 参加申込後の監督・選手変更は、実施要項「15連絡事項について」(14)の対応をすること。

3. 本部等の連絡先は次のとおりである。

① 大会前(7月2日まで)における連絡先

長崎県高体連登山専門部

(〒851-2127 長崎県西彼杵郡長与町高田郷3672番地 長崎北陽台高校内 TEL 095-883-6844)

*連絡先担当は小畑(おばた)。

② 大会本部

7月3～5日

千々石公民館(〒854-0405 長崎県雲仙市千々石町戊315番地6 TEL/FAX 0957-37-2520)

千々石中学校(〒854-0406 長崎県雲仙市千々石町己305番地 TEL 0957-37-2049)

*公民館・中学校に直接電話やFAXはしないこと。

7月5～6日

雲仙温泉 青雲荘(〒854-0621 長崎県雲仙市小浜町雲仙 500-1 TEL 0957-73-3273)

4. 実施要項「15.連絡事項について」(7)(8)に記載のとおり、暑さ・風雨・防虫等の対策、行動時の水分や塩分の補給を考えておくこと。また、今大会は熱中症対策として、経口補水液(500mL)を共同装備として各チーム2本を準備し持参すること。

5. 登山行動中、トイレのない区間があるため、登山前にトイレを済ませておくこと。行動中は次の通りである。

- ① 万里の長城、田代原キャンプ場、田代原トレイルセンターにトイレがある。万里の長城については、共同装備としてトイレトイレットペーパーを必ず持参し、使用すること。
- ② 妙見岳駅、仁田峠、池の原園地、宝原園地にトイレがある。仁田峠の売店は近寄らないこと。また、第2吹越は、緊急時に簡易テントでのトイレを検討する。

6. チーム行動はタイムレースではない。自チームのペース配分で行動すること。地点確認のフラグ付近では立ち止まらないこと。

7. 食料計画は次の通りとする。(○は各校で準備) 食材の管理や衛生面に十分注意すること。

	7月3日	7月4日	7月5日	7月6日
朝食		○	○	宿舎
昼食		○	○	
夕食	○	○	宿舎	

8. 概念図は令和4年度第65回大会より運営側では作成しないと九州専門委員長会議で決定している。なお、審査に関わる内容は、後日掲載される予定の「審査からの連絡」を参照すること。

9. 7月4日登山行動終了後に、小浜温泉へ隊ごとに向かい、入浴時間を作る予定である。バスおよび入浴代は、諸経費で対応するため、お金の準備は不要である。また、登山行動後すぐに移動の可能性もあるため、入浴に必要な道具類について、予報2号または監督・リーダー会議で説明する。

10. その他、詳細は予報2号にて掲載予定。

大会日程概略

	7月3日	7月4日	7月5日	7月6日
4:00		起床(4:30)	起床	
5:00			引継式	
6:00		引継式 登山行動開始(千々石中学校)	バス出発	起床
7:00		弘法原	田代原キャンプ場到着 登山行動開始	朝食
8:00		万里の長城	南の肩	
9:00		鉢巻山	第2吹越	閉会式
10:00	県内役員打合せ	田代原キャンプ場	妙見岳	解散
11:00	九州専門委員長会議	吾妻観音	仁田峠	
12:00	選手・監督受付	田代原キャンプ場	池の原園地	
13:00	監督・リーダー会議		矢岳	
14:00	開会式・登山隊編成 競技開始(諸審査)	千々石中学校	宝原園地(解団式)	
15:00		入浴移動 (A隊→C隊→B隊)	青雲荘	
16:00		本部役員会議	入浴	
17:00	引継式	設営・炊事審査		
18:00				
19:00	リーダー会議 本部役員会議	リーダー会議	食事	
20:00	就寝	就寝		
21:00			就寝	
22:00				

今後の日程調整によって、一部変更の可能性がある。予報2号で改めて連絡予定である。

荒天対策

1. 荒天対策は次のような場合に実施する。

- ① 風雨が激しく全面的に登山行動や幕営が困難なとき。
- ② ①に準ずる天候(雷の異常発生、河川の増水など)で稜線や沢筋での行動が困難なとき。
- ③ 台風の接近や集中豪雨のために、入下山口への経路が通行不能になったとき、または、そのおそれのあるとき。
- ④ 異常な高温時。(WBGT 31以上)
- ⑤ 道路決壊などで下山口からの輸送ができないとき

2. 荒天対策の実施

原則として情報(気象庁等の情報)を長崎県高体連登山専門部および大会役員で検討し、競技委員長または登山隊長が指示する。

3. 荒天対策は「行動可能な場合」と「行動不可能な場合」に分けて実施する。

I 行動可能な場合

ア 荒天等によって通常の登山行動が困難な場合、基本的に短縮コースまたは行動形態変更によって行動する。

イ 登山行動中の緊急避難について

登山行動中の天候の激変や落雷等の突発事項の場合は、事前に計画した荒天対策によらない緊急避難を行う可能性もある。

II 行動不可能な場合

ア 荒天により登山行動が不可能な場合は、登山行動を行わずに幕営地(宿泊地)で待機する。

イ 道路が規定雨量以上の降雨のため通行不能な場合は、幕営地(宿泊地)から移動せず待機する。

ウ 荒天により幕営が不可能な場合、または幕営中に天候が急変し避難する必要がある場合は、緊急避難場所に避難する。

*緊急避難場所として

千々石中学校体育館(男子および男性監督)・武道場(女子および女性監督)、千々石公民館(大会役員)

4. その他

地震(震度5弱以上)発生の場合、参加者全員の安全を確認し、大会中止などを含めて迅速な対応を行う。